# 文大生の故郷と都留 10

## 我が都留よ、永遠なれ

初等教育学科　４年
石塚　夕希子

私には、やりたいことがあった。やらなければならないことがあった。たったこれだけのことだけれど、これが都留へ来た理由だった。

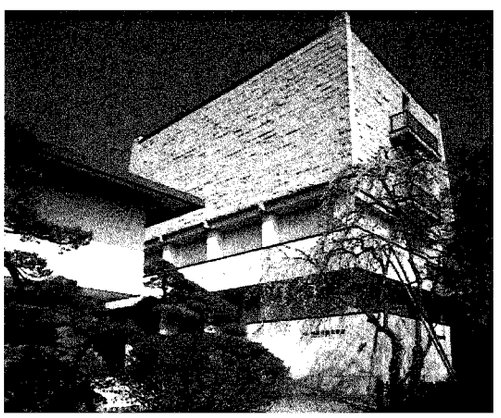
私の実家は、茨城にある。家族がいて、自分の車があって、特に不便でなかった中で、しかし何かが違っていた。不満だらけだった。たいてい家には帰らなかったし、大学を辞めると騒いだことも、家出をしようと荷物を友人の家へ運んだこともあった。前の大学では、人間科学部として組織や経営を学んでいた。自ら選択したこととはいえ、心から学びたいこととは違っていた。ただのわがままとか、気まぐれとか、他人へのうらやましさとか、外の人は、そう思ったかもしれない。いや、単にそれだけだったのかもしれない。しかし、いつもどこかで本当の自分を知りたくて、本当に心から望むべきことで自分を満たしていたかった。『やっぱり教師になりたい』そう思った。

先に述べたように、私の実家は茨城県笠間市にある。小さくて田舎だけれど、今思うとあたりは笠間焼を中心とした陶芸などの芸術や多くの自然物に囲まれていた。毎年五月一日から五日にかけて行われる『ひまつり』には、休日はもちろん、学校のある日でもランドセルを置くとすぐに出かけていった。本来、陶芸品の売買が中心であったが、私のお目当ては五十円のくじで当てるおもちゃのジュエリーやクレープ、殻に絵の描かれたゆで卵だった。また、陶芸・料理・書・絵画・篆刻（てんこく）・漆工芸などの多才を発揮し、『万能の異才』とうたわれた北大路魯山人が住居として使用していたという春風萬里荘もあった。実際、入園料を要したのであろうが、幼き無知の特権と言えようか、自由な出入りを許されていた。静かな庭園には、鯉の泳ぐ池や草花、アーチ状に架けられた橋などが美しくあって、芝生に横になっては、くじら雲ばかり探していた。また、笠間高校農業科の農場もあった。広々とした敷地には、ぶどう・梨などの果物、トマト・キャベツなどの野菜、カーネーション・フリージアなどの花があり、また牛・豚・鶏なども飼育されていた。春には長い桜並木となり、夏にはその木がかぶと虫採りの要地となった。秋には空一面に夕映えを背にとんぼが飛び交い、冬にはがらんとした草原となった。収穫のころになると、学生たちは一輪車を押してそれらを売りに来た。一見、柄の悪そうな彼・彼女たちも、真夏の強い日差しの中、汗を流しつつ売り歩く姿、ジュースを手渡す母に見せたあの笑顔は、子どもながらに別の一面を見せられた気がした。

その地から引っ越して早十一年。今でもそのあたりを歩くと、こんなにも道が狭かったのかと驚く。そして、歩取りとともに目の前に見えてくる一つ一つが、ものすごい勢いで当時の思い出を呼び起こさせる。何倍にも、何倍にも膨らませて――――。

都留に来て早一年。今年もまた、さんさんと暑い夏が来るのだろう。慣れ、ありふれてくると、当初目新しく思えたことにも感動する心がなくなってしまう。満たされず、悶々としていたあの思いを、ふとどこかに置き忘れてきてしまう。平静を自ら崩し、反対をなだめ、失ったものもあった中で都留に来た。今は何気ない都留の生活も、そして未だ十分にやりきれていないと思う日々の中で、都留をいつか離れるころには、そして十年、二十年後には幼きころの思い出と同様に、何倍にも膨れ上がった感を呼び起こすのであろうか。

そして都留での生活も、残り…二年をきった…。



笠間日動美術館